

源氏物語には五十四帖以外の巻があつた

——散佚した巢守巻の古写本断簡——

池田和臣

改竄される物語の写本

江戸時代になると、文学作品も版本による普及が始まる。版本によって一度に大量に印刷されるようになるのである。しかし、それより前は、写本というかたちで文学作品は読み継がれていた。物語や和歌集を読みたければ、人から本を借りて書き写すよりほかなかったのである。

経典などの宗教・信仰にかかわる書物は、聖なる教えを正確に誤りなく写そうとするため、一字一句原本どおりに写された。正当な文学と意識されていた漢詩・漢文・和歌も同様であつた。しかし、物語は女こどもの心を慰めるもの、もてあそびものであり、正当な文学とは考えられていなかった。平安時代にあつては、物語も物語作者も、その社会的地位は低かつたのである。現代のように、作家が羨望される職業になり、作品が著作権法で守られているの

は、文学にとってごくごく浅い歴史にすぎない。

社会的地位が低かったので、物語の原文を尊重し、正確に書き写そうとする意識は、平安時代の人々にはなかった。『枕草子』（能因本二六二段）には、「物語こそあしう書きなしつれば、言ふかひなく、作り人さへいとほしけれ」（物語が悪く書き直されると、その作者までが気の毒）とある。作者が気の毒になるほど勝手気ままに物語本文は書き変えられたのである。たとえば、『狭衣物語』の本文異同の激しさなどは、よく知られた事例である。

表現だけでなく、ストーリーまでが改変されることもあった。鎌倉時代初期（正治二年—一二〇〇—）から建仁元年（一二〇一—頃）に成った物語評論『無名草子』によると、『とりかへばや物語』にはストーリーの異なる古本と今本（改作本）が存在したと云う。『夜の寢覚』にも改作本（ダイジェスト本）が存在する。『伊勢物語』も、藤原定家の整理した一二五章段からなる形になるまでには、長きにわたる変動・成長が、すなわち後人による増補・改編があったと考えられている。

五十四帖以外の巻の存在

では、『源氏物語』はどうであったか。聖なる古典『源氏物語』には、そのような流動はなかったと思われるが、実は『源氏物語』も例外ではなかった。平安末期（嘉応元年—一二六九—から承安元年—一二七一—頃）に成った『簾中抄』、その異本である『白造紙』（正治年間—一一九九—から一二〇一—の書写）には、「コレハナキモアリコレカホカニノチノ人ノツクリソヘタルモノトモ」、すなわち五十四帖以外に後世の人が作り加えた巻として、「サクヒト」（桜人）「サムシロ」（狭筵）「スモリ」（巢守）の三巻の名が挙げられている。また、平安末期に成った『源

『源氏物語』の最初の注釈書『源氏積』には、桜人巻の十三カ所の本文が掲げられ、注釈が加えられている。

『源氏物語』も、平安末期には、表現の細部が改変されただけでなく、原作には無かった桜人巻や巢守巻などが書き加えられていたのである。平安時代中期の原典成立から鎌倉初期の藤原定家による青表紙本の整理までの約二百年間は、『源氏物語』もこのように流動していたのである。『源氏物語』が不動の古典・聖なる古典となるのは、藤原俊成・藤原定家などが和歌の手法・教科書として学問の対象にしてから後のことなのである。

古本「巢守」の復元

平安時代末から鎌倉時代にわたって、『源氏物語』の一部として読まれていた桜人巻や巢守巻であるが、残念ながらその写本そのものは散佚してしまい、今に伝わってはいない——室町時代に作られて写本が現存する『雲隠六帖』、そのなかにも桜人・巢守があるが、これらと平安末期の桜人・巢守とは別の作品である。区別するために、散佚した巢守は古本巢守巻とも呼ばれる。

しかし、幸いなことに古本巢守巻については、間接的な資料がいくらか残されている。

・『無名草子』（正治二年—一二〇〇—から建仁元年—一二〇一—頃、俊成むすめ女むすめ作か）……「浮舟の君、巢守の中の君などの、兵部卿の宮には思ひおとし侍るこそ口惜しけれ……巢守の君は心憎き人のさまなれば……」とある（宇治の中君説、巢守の中君説の両説あり）。

・『風葉和歌集』（文永八年—一二七一—撰集）……現行『源氏物語』に見えない四首（薰二首・匂宮一首・一品内親王三位一首）がある。巢守巻で登場人物の詠んだ歌と思われる。

・堀部正二『中古日本文学の研究―資料と実証―』……『源氏物語和歌集』（詞書きよりも歌を高く書いているゆえ、巢守巻そのものでも梗概本でもなく、和歌中心のいわゆる源氏物語歌集と判断される）の断簡。「すもり内よりいづるに、宮車にすべりのらせ給て、宮」云々とあり、匂宮と巢守三位の歌三首が記されている。巢守巻で登場人物の詠んだ歌と思われる。

・鎌倉時代以降に作られた『源氏物語古系図』の類（登場人物の多い物語を理解しやすくするために、人々の系図と簡略な説明を付した書物）……正嘉本―桃園文庫本・天理本―、伝清水谷実秋筆本、大島本、伝家隆筆専修大学本、鶴見大学本、国文学研究資料館本、源氏物語巨細、系図小鑑などにみえる、巢守巻の登場人物についての記述。

これらの資料から、巢守巻の人間関係とストーリーがある程度復元できる。伝清水谷実秋筆本古系図では、蛍兵部卿宮の孫であるべき巢守の三位を蛍兵部卿宮の子にしていたり、国文学研究資料館本古系図では、やはり蛍兵部卿宮の孫であるべき中君（内侍典侍）を蛍兵部卿宮の子にしていたり、資料によって異同がみられるが、あらまはは次のような内容である。

光源氏の異母弟である蛍兵部卿宮、その子である源三位には一男二女（頭中将・巢守三位・中君）があった。妹の中君は今上天皇の娘である女一宮に仕え、匂宮が通っていた。やがて、匂宮は頭中将の手引きで姉巢守君にも通うようになり、巢守君も女一宮に仕えることになった。祖父・父からの伝えの琵琶の才で、巢守君は三位を賜った。中君のもとには匂宮の兄宮（式部卿宮）が通ってくるようになった。中君は乳母に譲られて典侍になった（鶴見大学本古系図）。姉の巢守君は匂宮の華やかな性格を嫌い、薫君の心深さに動かされ愛し合うようになった（鶴見大学本では

薫と巢守君との関係は大内山隠棲後のこととする。巢守君は薫との間に若君を生むが、その後も匂宮は巢守君につきまとい、それを厭うた巢守君は、女四宮（冷泉院の女御であったが、寵愛薄きゆえ出家した）のいる大内山に身を隠し、ともに勤行に明け暮れた。

巢守巻の匂宮・巢守三位・薫の関係は、現行の源氏物語の薫・浮舟・匂宮の関係を逆転したものとなっている。現行の物語では、まじめな貴公子薫が色好みの匂宮に浮舟を奪われるのだが、巢守の物語では、薫が匂宮から巢守君を奪うことになっている。薫に同情した後人が、薫を恋の勝利者に仕立て上げようと、巢守巻を書き加えたのだと推察される。

二枚の物語の断簡

ここに二枚の物語の断簡がある。平安・鎌倉時代の古写本の文字は美しいので、一頁ずつに切断され、手鑑に貼られたり掛け軸にされた。この二枚もそういう目的で切断されたものである。

そして、この二枚の断簡は同じ一冊の写本から切り取られた別々の頁（「ツレ」と云う）と認められる。料紙の質が同じであること、料紙の大きさがほぼ同じであること、一面十一行書きという体裁が同じであること、そしてなによりも癖の強い筆跡が同じであるからである。同様な筆癖と字形を表にして示してみる。（ ）の中の数字は本文の行数。また、表に拾い出した文字は、それぞれの断簡本文の該当する文字右傍に傍線を付しておいた。

以上のように、この二枚の断簡は同じ一冊の写本から切り取られた別々の頁、すなわちツレであると認定できる。ただし、意地悪く考えれば、次のような可能性も理屈としては考えられる。これらは、別々の二種類の散佚物語の写本から切り取られた、別々の物語の一頁ずつである、と。しかしながら、同じ筆跡で書かれた同じ体裁の散佚物語が二種類も存在したという可能性は、理屈としてはあり得ても現実的な可能性は極めて低い。同じ一冊の写本から切り取られた別々の二頁と考えるべきである。

古本「巢守」の古写本断簡

さて、物語の断簡というと、『源氏物語』か『伊勢物語』か『狭衣物語』あたりと相場は決まっているのだが、このツレ二枚の物語の断簡はそれらの断簡ではない。また、現存する他の物語にも該当するものがない。二枚目には和歌が記されているが、新編国歌大観・物語和歌総覧・鎌倉時代物語集成（中世王朝物語全集）などで検索しても、該当する和歌が存在しない。散佚してしまった物語の一部分と考えられるのである。ミロのビーナスの失われた片腕ならぬ、失われた指先、あるいは失われた爪の先が出てきたということになる。はたしてどのような物語の残骸なのか。

かへりたまいてなき給あはれに心くるしけなり
 かたちはにる物なくともをふかく思ひまは
 し給まへる御さまににる物なきを人もなみ
 たくまる中のきみはおとうとなれといとよくつ

ことをおしやりて本ま、くわんそよみ
 給いとけはいかすかにてうらやましう
 のみたまへは

うき世をもかけはなれなはいる月は

き給て身をもやすらかにもてなし給へりせん
しもまつよりみつへきたれは思ひまして

内侍のすけゆつりてなり給へりはなやかに

いまめかしくてしきふきやうの宮すすみ

給おなしゆかりと思ひしかとなくさめかたくて

なを恋しき人のおもひをかれぬに人は

ひと方に思ひなりてまといありき 給 ふたはやす

1 〈伝冷泉為相筆〉



山こそついのすみかななるらめ
なみたさへおつるけしきなるに

そひふし給へり宮いさりいて給へ は い、

さしつ宮の御まへにしやうのこと

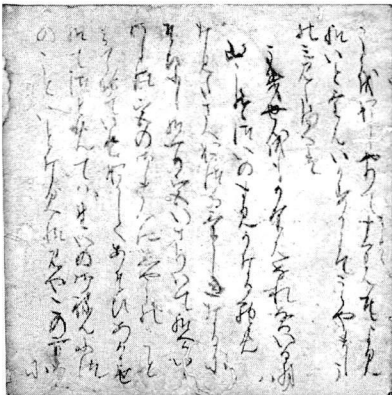
まいらせていとおかしくあそひあかさせ

給てつとめてはれいの御ねんふつ

のこといとなみ給みやこの方 なん

に

2 〈伝越部局筆〉



一枚目には、「中のきみ」（中君）、「せんじ」（宣旨）、「内侍のすけ」（典侍）、「しきぶきやうの宮」（式部卿の宮）などの語があり、古本巢守の巻の登場人物とまったく重なっている。

「心苦しげに泣いている、麗しい思慮深そうな女」は、巢守君と思われる。誤写があるのか波線部分の意味が不明であるが、「中の君」に関わって「せんじ」（宣旨）という表現があり、『源氏物語巨細』が中君を「宣旨」と呼称することと関係がありそうだ。また、誰かから中君が「内侍のすけ」の地位を譲られたとあるが、鶴見大学本古系図の「御めのとのゆつりにてないしのすけになる」、あるいは国文学研究資料館本古系図の「御乳母のゆつりにて典侍になり給ふ」という説明と一致している。宣旨と呼ばれていた乳母から中君が典侍の職を譲られたか、あるいは女一宮のもとは宣旨と呼ばれていた中君が乳母から典侍の職を譲られたかの、いずれかであろう。

「宣旨」は、天皇の命令（宣旨）を藏人に伝える尚侍・典侍などの内侍司の上臈の女官を指す他、中宮・春宮・斎院・関白家などの上臈女房をも指す。『源氏物語』では桐壺院の女房、朝顔齋院の女房に宣旨がいる。それゆえ、女一宮付の女房である中君が宣旨と呼ばれていてもおかしくはない。また、乳母が宣旨と呼ばれていたのなら、それはその乳母が宣旨を伝える典侍の職にあつたためと考えられる。

断簡にはさらに、「中君ははなやかで現代風な人で、式部卿宮が通い始めた。以前は（おなじゆかり）、すなわち式部卿宮の兄弟が通っていて、その男のことが忘れられないのだが、その男の方は新しい女に夢中になっている」ということが書かれている。このことも、「中君に通っていた匂宮が姉の巢守君に通うようになり、中君には匂宮の兄の式部卿宮が通うようになった」という古系図類の説明に一致している。

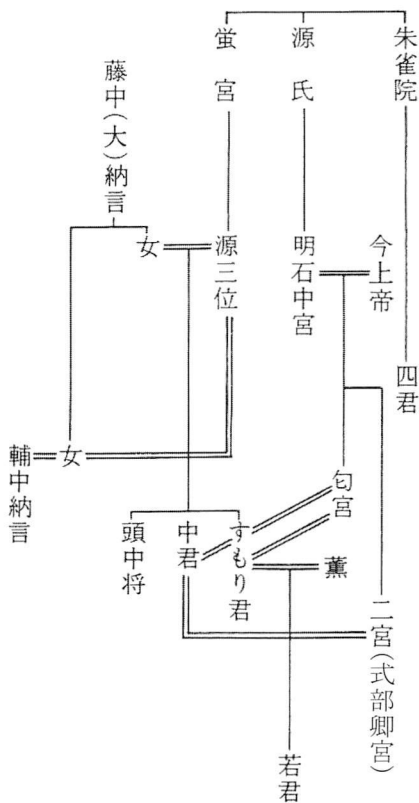
二枚目は大内山の場面であろう。經典らしい十巻を読んでいるのは四宮か、それを見てうらやましく思い涙するのは巢守君であろう。「そひふし給へり」がよく分からない。巢守君がものに寄りかかったのか、誰かが巢守の傍らに

添い寝したのか判然としない。後者なら、引き続いて「宮いざりいで給へばい、さしつ」とあるから、巢守君に添い寝したのは四宮ではないだろう。巢守君が四宮にはばかって話すのを止めた、その話し相手が確実にここには居る。四宮の目をはばかる誰かが巢守君に添い寝していることになる。それは薫以外に考えられない。とするなら、鶴見大
 学本古系図が「朱雀院の四宮に参りて隠れたりしを薫中将見給て語らひより給ふ」とするよう、薫と巢守君の関
 係は巢守君が大内山に隠棲した後ということも考えられるか。そこまでゆかなくとも、少なくとも薫と巢守君の関
 係は、大内山隠棲後も続いていたということにはなろう。

「うき世をもかけはなれなばいる月は山こそついのすみかなるらめ」（自分も俗世を背いて出家したら、月と同じよ
 うにこの山が終の棲家となるのでしよ
 う）という女君の心情や、念仏にいそ
 しむ姿は、古系図類にある巢守君の説
 明に合致している。

以上のように、二枚の断簡は間接的
 資料から復元されている古本巢守の内
 容にびたりと一致している。「巢守の
 君」とか「巢守の三位」とか、「巢守」
 という言葉そのものはないので、この
 断簡が百パーセント巢守巻であると断
 定することはできないが、見てきたよ

参考（人間関係図）



うな状況証拠の上からは、幻の巢守巻の写本の一部と考えられるのである。

平安末期から鎌倉期にかけて、『源氏物語』の一部として読まれながら散佚してしまった巢守巻、その写本そのものの一部分が、わずかな欠片かけらにはすぎないが、ここに出現したのである。同じ写本から切り取られた別の頁（ツレ）のさらなる発見を、そしてそのことによって幻の巢守巻の実体が明らかになることを、切に期待したい。

一枚目の断簡と『浜松中納言物語』散佚首巻

一枚目の断簡は十五年ほど前から手元にあったが、そこに記された「中のきみ」（中の君）と「しきふさやうの宮」（式部卿の宮）との関係は、古本「巢守」のみならず、『浜松中納言物語』の散佚首巻の人間関係とも重なるものであった。それゆえ、いずれの物語か臆断を下すことが出来ないでいたが、一昨年ツレの二枚目が出現、古本「巢守」の大内山の場面と推測されたので、古本「巢守」の断簡として紹介することにした次第である。そこで念のために、復元されている『浜松中納言物語』の散佚首巻の内容も記しておく。

式部卿宮に優れた一人息子がいた。声望も高かったが、臣籍に下し源姓を与えた。これが主人公である。式部卿宮は亡くなり、北の方は左大将と再婚した。左大将も妻を亡くしており、大君・中君の姫君がいた。男君は継父左大将を嫌い、母は思い悩んだ。男君は中納言になり、帝の若皇子が式部卿となった。この式部卿は名高き色好みで、左大将の大君を望み、父左大将も承諾した。しかし、義兄妹として大君に親しんでいた中納言は、その縁談を知り、大君を我が物としてしまふ。

その頃、中納言は故父宮が唐の第三皇子に転生していることを伝え聞く。式部卿宮が大君に近づかないか気がかり

であったが、孝養の志深い中納言は、唐に渡ることを決意する。中納言渡唐の後、大君が中納言の子を身ごもっていることが分かる。こうなると、父左大将は式部卿宮を大君に通わすことも出来ず、代わりに中君を式部卿に通わせた。中納言の子を懐妊した大君は、中納言の母の邸に預けられたが、父に見捨てられたように思い出家してしまう。やがて尼姿の大君は女子を出産した。

しかしながら、一枚目の「せんし」（宣旨）、「内侍のすけ」（典侍）という語、そして二枚目の主人公が「山」で「宮」と勤行にいそしむ場面を総合すると、やはりこの二枚の断簡は『浜松中納言物語』の散佚首巻ではなく、古本「巢守」と臆断されるのである。

放射性炭素による年代測定

なお、放射性炭素の含有量から和紙の年代を測定する最新科学の研究によって、これら断簡は次のような測定結果が得られている。

±2σ 670±28 1288 (1297) 1304、1367 () 1384

2σ (二標準偏差) の誤差範囲には約95・45パーセントの確率で実際の年代が含まれるとされている。また、() 内の数値は、炭素14年代の670を暦年代に換算(較正)した年代であり、最も確率の高い年代である。それゆえ、この断簡の測定結果は鎌倉末から南北朝時代(1288～1304年か1367～1384年)のものという誤差範囲であるが、() 内の1297という年代の近辺に実際の年代がある確率が高い。つまり、この断簡は鎌倉末期のものである確率が高く、鎌倉末期の巢守巻の写本の存在を示す物証なのである。

おわりに

散佚物語巢守巻の古写本断簡の報告、それをとおして述べておきたかったふたつのことがある。

ひとつは、散佚作品研究における古筆切の資料的価値についてである。古写本を一頁ずつに切断した古筆切は、それ自体としては微々たる断片でしかない。しかし時たま、まったく写本が伝存していない作品の、あるいは完全な形の写本が伝存していない作品の、すなわち散佚作品の古筆切が出現する。そういう時は、たった一枚の古筆切が散佚してしまつた作品の実体究明の貴重な資料となる。ミロのビーナスの失われた片腕ならぬ、失われた指先、失われた爪の先にしかすぎないものが、おおきな意義を持つ。それゆえ、散佚作品の古筆切が出現した時には、その存在をすみやかに多くの人に知ってもらい、まだどこかに埋もれているかも知れないツレを、一枚でも多く発見する契機となければならない。散佚した『源氏物語』の外伝、巢守巻と推定される断簡の存在を報告することによって、さらなるツレの発見を期待し、巢守巻の実体が明らかになることを切に望みたい。

もうひとつは、平安時代における物語書写の実状についてである。書写する者の手によって表現や筋立が改変されてしまう、物語の流動するありようを再認識しておきたい。ひいては、写本文化の中で作品が古典へと成長することは、作者の原典から遠ざかることでもあり、多くの人々の手によって洗練されてゆくことなのだというのを、再認識しておきたい。古典の中の古典、聖なる古典と見なされている『源氏物語』も、原典成立から定家本が整定されるまでの二百年間は、後人の手が加えられ流動していたのである。古写本巢守巻の断簡の存在がその証である。鎌倉末期書写の巢守巻の写本の存在は、鎌倉末期においても『源氏物語』の一部として巢守巻が読まれ、『源氏物語』の

流動がささやかながら続いていたことの、証しなのである。

付記

シンポジウムでの題は〈『源氏物語』外伝―散佚「単守」の古写本断簡か―〉であったが、題を〈源氏物語には五十四帖以外の巻があった〉に改め、原稿化した。